

(2)その他、特筆すべき教育・研究・診療・社会貢献活動等への取組と成果、世界的位置付け(ISI citation など)など。* ISI データのない場合は、可能であればいろいろな指標を使って国内的位置づけを示す。

分野	取組と成果、世界的位置づけ	18年度の状況
特筆すべき教育活動	<p>1.平成16年度に採択された21世紀COEプログラム「医薬開発統括学術分野創生と人材育成拠点」(拠点リーダー：今井潤薬学研究科教授)は医薬開発のための教育拠点、人材育成拠点を目指したものであるが、その取り組みのひとつとして、MCS (Master of Clinical Science) コースを設け、医薬臨床開発の人材育成を目指した教育を平成17年度から実践している。このMCSコースの教育プログラムは、薬剤師認定制度認証機構から平成18年度に認証を受け、19年度より、「研修認定薬剤師制度」における研修会として単位を授与することができるようになった。このことは、本コースが高度で卓越した薬剤師の教育システムとして認められたことを意味する。</p>	
特筆すべき研究活動	<p>1.大槻純男准教授は薬の脳への移行を制限している血液脳関門の輸送機能を脳の支援・防御システムであるとの新たな視点から分子生物薬剤学的に追求し、数多くの脳関門輸送の分子機構を新たに明らかにすることで血液脳関門輸送の分子的基盤を構築した。本成果が分子的基盤に基づく中枢神経疾患治療薬開発の進展につながることで評価され「中枢支援・防御システムとしての新たな血液脳関門輸送機構の解明」で東京テクノ・フォーラム21ゴールド・メダル賞を受賞した。</p> <p>2.徳山英利教授は、新規反応の開発と効率的な合成設計により、抗腫瘍剤ピンブラスチンとピンクリスチンを代表例とした、構造的に複雑かつ医薬的に重要な生理活性を示す多数のアルカロイドの効率的かつ独創性の高い全合成を達成し、平成19年度の文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞した。</p> <p>3.今井潤教授が中心となって、世界に類をみない臨床疫学研究である「大迫研究」、大規模介入試験である「HOMED-BP研究」、大規模調査追跡研究である「J-HOME研究」を行っている。そのうち「大迫研究」は21年の歴史をもつ臨床疫学研究であり、世界保健機構(WHO)における家庭血圧の高血圧国際基準の唯一の根拠となっている。</p> <p>4.倉田祥一郎教授は、感染防御に重要な役割を果たす自然免疫において、ペプチドグリカン認識蛋白質-LEが、血液中、免疫応答細胞上、さらには、免疫応答細胞内において、病原体認識受容体として働くことを明らかにした。これは、病原体認識受容体が多機能性を示すことを初めて明らかにしたものであり、その成果はNature Immunology誌に掲載された。</p>	
特筆すべき社会貢献活動	<p>1.今井潤教授が中心となって行っている「大迫研究」は、生活習慣病、ならびにその合併症の発症の予防に貢献し、さらに、「J-HOME研究」は、降圧薬服用者において家庭血圧コントロールに関わる要因および予後・臓器障害との関連を明らかにするための臨床疫学研究であるが、これらの研究成果が、直接患者へフィードバックされることにより個々の患者の治療に貢献するとともに、高血圧治療における適切な薬物療法を示すことになり、大きな社会貢献を行っている。</p>	